

令和 5 年 6 月 16 日現在

機関番号：34506

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2022

課題番号：18K00154

研究課題名（和文）障害者の創作活動における芸術家の役割の検証

研究課題名（英文）The Role of artists in artistic practices by people with disabilities

研究代表者

服部 正（Hattori, Tadashi）

甲南大学・文学部・教授

研究者番号：40712419

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、障害者の創作現場への芸術家の関与の諸相を分析することを通じて、障害者の創作活動が芸術分野における実践として評価される過程で芸術家が果たす役割を明らかにすることを目指すものだ。新型コロナウイルス感染症の影響を受け、国外での調査研究は限定的なものにならざるを得なかったが、その分、国内での調査研究を充実させ、その成果をドキュメント映像による展覧会として発表することができた。研究成果を芸術系大学での展覧会の開催という形式で公表したことによって、障害者の創作現場に若い世代の芸術家が関与する意欲を刺激することができ、一定の社会的貢献につながった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究により、障害者の創作活動を支援する意識と、アーティストの問題意識には親和性が高いことが明らかになった。日本では、障害者の創作物に「アール・ブリュット」などの名前を付けて、通常の美術活動とは分離して評価する傾向があるが、障害者が被っている差別や社会的困難など、障害者福祉に関する現代社会の問題の解決のために、障害者とアーティストが協働して取り組んでいる事例も増えつつある。アーティストがこの問題により積極的に関わるためには、障害者の創作活動についてあまり知識がない、あるいは関心がないアーティストにも出会いの場を提供することが重要であり、そのための提案を今回の研究では示すことができた。

研究成果の概要（英文）：This research aims to analyze the various aspects of artists' involvement in the creative activities by people with disabilities, and to clarify the role that artists play in the process of evaluating the creative works of people with disabilities in the art world. Due to the impact of COVID-19, international research had to be limited. Instead of that, I was able to enrich my research in Japan and present the results as an exhibition with documentary movies. By presenting the results of our research in the form of an exhibition at an art university, I was able to stimulate the young generation of artists to get involved in the creative activities by people with disabilities. That was an important social contribution of this research.

研究分野：芸術学

キーワード：障害者の文化芸術活動 アール・ブリュット アウトサイダー・アート 芸術と福祉

## 1. 研究開始当初の背景

近年、日本では障害のある人の創作活動への関心が急速に高まっている。しかし、創作活動といいながらも、それに対する芸術学的視点からの分析や研究は極めて限定的であり、多くの活動が障害者福祉政策との関連で実践的に行われるのみである。「障害者芸術における芸術の不在」とでも呼ぶべきこの特異な状況を分析的に検証するためには、芸術家やそれを取り巻く批評家、画商などが障害者の創作にどのような関心を示してきたかを検証する必要があると考えられた。

## 2. 研究の目的と方法

本研究は、障害者が創作活動を実践する国内外の現場において、プロの芸術家がどのように関与しているかを分析するとともに、そのような実践現場を運営する責任者や現場に関与する芸術家への聞き取り調査を行うことを通じて、障害者の創作活動の実践や評価に対して芸術家の活動が果たす役割や与える影響を精査することを目的とする。それを通じて、障害者の創作活動に対する学術的研究を発展させるうえでの基盤となる資料と情報の集積を行うことを目指す。

## 3. 研究成果

以下、年度ごとの活動と研究成果を報告する。

2018年度の研究の最大の成果として、フランスで障害のある芸術家の作品の発表や販売を促進するために設立された非営利団体エガールのディレクターであるマリー・ジロー氏と共同研究を行ったことが挙げられる。エガールは、パリ近郊クレイエ＝スイイの大規模な障害者支援施設サントル・ドゥ・ラ・ガブリエルの代表者であるルナデット・グロジョー氏が2010年に設立したものだ。研究代表者は、エガールに所属する芸術家を紹介する日本での展覧会の企画に関わり、その実現の過程でジロー氏、グロジョー氏と頻繁に意見交換を行った。

エガールでは、支援する芸術家の決定にあたり、学芸員、美術評論家など芸術分野の専門家による審査委員会を設置し、その合議によって採択の可否を決定する。エガールを設立したのは障害者福祉に関わる団体であり、芸術家の活動を支援するための金銭的基盤も主に障害者支援の補助金や寄付金によるものである。しかし、作品の評価は美術の専門家に委ね、支援する作家の活動の場としても福祉界ではなく美術業界を重視している。そのため、エガールとしてのグループ展よりも、作家の個展の開催に意義があると考えている。このことは、「アール・ブリュット」などの名前のもとにグループ展で障害のある芸術家を紹介することが主流となっている日本の状況とは好対照である。この知見は、本研究の今後の調査・研究に置いて、他の事例を検証する際の参照軸としていくことになった。

その他、ベルギーでマンガとアール・ブリュットの関係性を研究するエルヴィン・デジャス氏との共同研究にも着手し、次年度以降にその成果が実を結ぶことになった。

2019年度の最大の成果は、ベルギーにて障害者のためのアトリエを訪問し、そこでの芸術家の役割について調査・研究を行ったことだ。

リエージュでは、デジャス氏の案内でトリンクホール・ミュージアムに名称変更してリニューアル開館する予定のマッドミュゼのリノベーション建築中の現場を訪れ、ディレクター、スタッフと意見交換を行った。リエージュでは、障害者が美術や身体表現などの創作活動を行うアトリエで、マッドミュゼの運営母体であるクレアム・レジオン・ワロンヌも訪問し、活動中の障害のあるアーティストや支援者であるプロのアーティストから話を聞いた。ヴィエルサルムでは、様々な分野のアーティストと共同で活動を行っているラ・エス・グラン・ダトリエを訪問し、見学と聞き取り調査、資料収集を行った。コルトレイク近郊のハーレルベークでは、クンストプラーツ・デ・ザンベルクを訪問し、施設見学と聞き取り調査を行った。さらに、コルトレイクの障害者支援団体 wit.h.も訪問し、先進的な活動について調査を行った。wit.h.は、障害者が社会とつながるための様々なプロジェクトを、様々なアーティストと共同で行っている団体で、ちょうどヘントのギズラン博士博物館でダウン症の出生前診断の問題をダウン症の人とアーティストが一緒に考えるプロジェクトを視覚化した企画展「bloedtest (血液検査)」を主催・開催していた。いずれの施設でも、芸術家が障害者の作品を評価して社会・美術界につなげるという「アール・ブリュット／アウトサイダー・アート」のモデルから脱却し、障害者と芸術家が協働して共通のミッションを達成するという方向にシフトしていることを確認できた。

2020年度は新型コロナウイルスによる外出制限の影響が大きく、予定していた調査を十分には行うことができなかった。文献調査やオンラインでの聞き取り調査しか行えなかったが、それでも、これまでの調査や研究をもとに、障害者の創作活動と現代美術家の活動の関係に焦点を当てた研究成果の公表をいくつか行うことができた。『臨床心理学増刊第12号 治療は文化である—治療と臨床の民族学〈エスノグラフィ〉』に発表した論文「アール・ブリュットの限界とアートの力」では、前年度にベルギーで行った調査や国内での美術家への聞き取り調査に基づき、リエージュのマッドミュゼがトリンクホール・ミュージアムとしてリニューアルした事例や、山村幸則と森口敏夫の共同制作作品《どうしょんど》などを取り上げつつ、障害当事者の支援という視点から障害者の創作活動と現代美術の関係について考察を試みた。

また、新型コロナウイルスの芸術分野での影響を考えるために、ドイツ在住の美術家、美術館学芸員、身体表現団体の主宰者、音楽学の研究者を招いてオンラインのシンポジウムを開催し、その中で障害者の表現活動における新型コロナウイルスの深刻な影響について、支援施設への聞き取り調査で得た知見を報告した。この内容を書き起こしてまとめた報告を学会誌に投稿し掲載されたことは、コロナ禍における障害者の芸術活動に生じた問題を記録にとどめる意味でも大きな意義があった。

2021年度も、引き続き新型コロナウイルス感染症の影響により、障害者支援施設の訪問が極端に制限される状況の中、聞き取り調査を十分に進めることには困難を伴った。そのため、予定していた国外での調査・研究を断念し、国内での調査を充実させる方向へと方針転換を行った。

そのなかで、舞踏家・岩下徹氏にインタビューを行い、これまでに岩下氏が行ってきた障害者との協働による即興ダンスについて映像や文献資料の提供を受けた。インタビューでは、障害者との協働により、障害者が少なくともセッションの間において岩下氏と心の交感があること、障害者が長い時間をかけて少しずつ変わっていくこと、岩下氏自身のダンスへの向き合い方が障害者との協働によって変わってきたことなど、印象深い体験談を聞くことができた。この成果は、2022年度の岩下氏へのインタビュー映像の制作へとつながった。

さらに、2022年1月から京都国際マンガミュージアムで開催された展覧会「縮小社会のエビデンスとメッセージ：人口・経済／医療・福祉／教育・文化／地域・国際そしてマンガ」に共同企画者のひとりとして参加し、その準備の過程で大阪市東淀川区の福祉施設である西淡路希望の家で活動する利用者の野村知広氏と下司雅英氏を取材し、現代美術家の高橋耕平氏に依頼して彼らの日常と創作を記録したドキュメンタリー映像を作成した。この展覧会に参画することで得た知見と研究手法を、最終年度に発展させ、最終的な研究成果とすることができた。

加えて、日本のマンガと障害者の創作の関係について、オンラインで行われたブリュッセル自由大学でのシンポジウムで基調講演を行った。2019年からベルギーの研究者デジャス氏と共同で行ってきた研究の成果であり、漫画家と障害のある創作者の協働の可能性について検討することにつながった。

最終年度である2022年度は、主に関西で障害者の表現活動に関わっている6名の芸術家に対する調査を、高橋耕平氏の協力のもとで行い、その成果を京都芸術大学ギャラリーオーブ前通路スペースでの展覧会「服部正+高橋耕平 Research Question vol.01：芸術家と障害のある人の創作が会う時」(2023年1月10日～1月15日)で公表した。当初の計画にはなかった展覧会を実現できたのは、国外での調査が行えなかったことによる怪我の功名とも言えるものだ。美術系大学での展覧会という形式による研究の可視化は、この分野に関心のない若い芸術家たちへの刺激にもなり、また研究をリサーチ型の表現活動を行っている芸術家と共同で行い、成果を展覧会という形式で可視化することは、芸術研究の新たな可能性を探求することにもつながった。会場となった京都芸術大学の在学生の中には、たまたま通りがかりに自分が授業を受けたことのある教員のインタビューが目に入り。足を止めて聞き入ったという人もいたという。そのような若い世代の中から、障害のある人の創作活動に誠実に関わる人が育ってくれるならば、それは本研究の大きな社会的意義と言えるだろう。

最終成果であるこの展覧会については、インタビューの全文と研究代表者、そして協力者である高橋氏のテキスト、展覧会場の写真を掲載した全 86 ページの記録集を作成し、研究代表者の個人ウェブサイトで公開した。詳しくはそちらを参照していただきたい。個人ウェブサイトでは、記録集に掲載できなかった会場風景写真も公開している。

記録集

[https://tadashi-hattori.com/wp/wp-content/uploads/2023/06/ResearchQuestion01\\_report.pdf](https://tadashi-hattori.com/wp/wp-content/uploads/2023/06/ResearchQuestion01_report.pdf)

会場風景

[https://tadashi-hattori.com/research\\_cat/%e6%9c%8d%e9%83%a8%e6%ad%a3%ef%bc%8b%e9%ab%99%e6%a9%8b%e8%80%95%e5%b9%b3%e3%80%80research-question-vol-01%ef%bc%9a%e8%8a%b8%e8%a1%93%e5%ae%b6%e3%81%a8%e9%9a%9c%e5%ae%b3%e3%81%ae%e3%81%82%e3%82%8b/](https://tadashi-hattori.com/research_cat/%e6%9c%8d%e9%83%a8%e6%ad%a3%ef%bc%8b%e9%ab%99%e6%a9%8b%e8%80%95%e5%b9%b3%e3%80%80research-question-vol-01%ef%bc%9a%e8%8a%b8%e8%a1%93%e5%ae%b6%e3%81%a8%e9%9a%9c%e5%ae%b3%e3%81%ae%e3%81%82%e3%82%8b/)

なお、本研究の実施期間中に、障害者の創作活動をめぐって社会的には大きな動きがあった。2018 年 6 月に「障害者による文化芸術活動の推進に関する法律」が公布・施行され、法律の理念に従って障害のある人の創作活動を支援、推進する様々な施策が実施されるようになった。この法律では、地方公共団体が「障害者による文化芸術活動の推進に関する計画を定める」ことが努力目標として示されている。それを受けて、2019 年度以降、多くの自治体が文化施策や福祉施策の計画書等に、障害者の創作活動支援に関する施策を組み込むための検討を始めた。研究代表者も、有識者としていくつかの自治体の計画策定に関わったが、そこでの提言の内容には、本研究で得た知見が大いに生かされることになった。

特に 2022 年度は、厚生労働省と文化庁が障害者による文化芸術活動の推進に関する基本計画改定のための障害者文化芸術活動推進有識者会議を開催し、年度末に第 2 期基本計画を公表したが、研究代表者もこの有識者会議の構成員として、今後の政策決定に関わる提言を行う機会を得た。そこでは、本研究で得た知見、すなわち、障害者の創作活動を特別な芸術として分離・分断するのではなく、芸術家との協働の機会を増やすことで現代の通常の芸術活動と接続することの重要性を強調し、そのことは基本計画にも盛り込まれた。そのことを、本研究が果たした社会的貢献のひとつとして付記しておく。なお、本有識者会議については、以下のサイトに議事録等の記録が掲載されている。

[https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunka\\_gyosei/shokan\\_horei/geijutsu\\_bunka/shogaisha\\_bunkageijutsu/shogaisha\\_yushiki/index.html](https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunka_gyosei/shokan_horei/geijutsu_bunka/shogaisha_bunkageijutsu/shogaisha_yushiki/index.html)

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 服部正	4. 巻 19巻1号
2. 論文標題 新型出生前診断がもたらすトラウマ、そのアートによる回復支援について	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 トラウマティック・ストレス	6. 最初と最後の頁 35-42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 服部正	4. 巻 38号
2. 論文標題 長沢秀之に聞く：対話「私が生まれたとき」プロジェクトとは何だったのか	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 民族藝術学会誌 arts/	6. 最初と最後の頁 127-136
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 服部正	4. 巻 増刊第12号
2. 論文標題 アール・ブリュットの限界とアートの力	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 臨床心理学	6. 最初と最後の頁 190-195
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 浅野夕紀・大谷 燠・小林 公・中川 眞 / 服部正（編著）	4. 巻 37
2. 論文標題 コロナ状況下での芸術表現：創作と発信の工夫と苦悩	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 民族藝術学会誌 arts /	6. 最初と最後の頁 233-246
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 服部正	4. 巻 98
2. 論文標題 二つのアール・ブリュット 戦後フランスと現代日本	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本病跡学雑誌	6. 最初と最後の頁 28-35
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 服部正	4. 巻 36
2. 論文標題 障害者の芸術活動の今日的課題	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 民族藝術学会誌 arts/	6. 最初と最後の頁 38-41
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 服部正	4. 巻 第48巻第3号
2. 論文標題 現代の「アール・ブリュット」と日本の作品	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 臨床精神医学	6. 最初と最後の頁 317-324
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 服部正	4. 巻 第91号
2. 論文標題 アウトサイダー・アートと現代社会 - 映画「地蔵とリビドー」から考える -	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 神奈川大学評論	6. 最初と最後の頁 45-54
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 Tadashi Hattori
2. 発表標題 Japanese Outsider Art Based on Comics
3. 学会等名 Colloque - Bandes dessinees hors-champs (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 服部正
2. 発表標題 新型出生前診断がもたらすトラウマ、そのアートによる回復支援について
3. 学会等名 第19回日本トラウマティック・ストレス学会 (招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 服部正
2. 発表標題 「芸術家」になれなかった山下清
3. 学会等名 芸術学関連学会連合
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 服部正
2. 発表標題 二つのアール・ブリュット 戦後フランスと現代日本
3. 学会等名 日本病跡学会総会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 Patrick Martin-Mattera, Celine Masson, Nicolas Tajan et al.	4. 発行年 2022年
2. 出版社 Editions In Press	5. 総ページ数 224
3. 書名 La Douleur a l'oeuvre, corps, art, folie	

〔産業財産権〕

〔その他〕

最終成果物ウェブサイト（服部正研究室ウェブサイト内） <a href="https://tadashi-hattori.com/research_cat/%e6%9c%8d%e9%83%a8%e6%ad%a3%ef%bc%8b%e9%ab%99%e6%a9%8b%e8%80%95%e5%b9%b3%e3%80%80research-question-vol-01%ef%bc%9a%e8%8a%b8%e8%a1%93%e5%ae%b6%e3%81%a8%e9%9a%9c%e5%ae%b3%e3%81%ae%e3%81%82%e3%82%8b/">https://tadashi-hattori.com/research_cat/%e6%9c%8d%e9%83%a8%e6%ad%a3%ef%bc%8b%e9%ab%99%e6%a9%8b%e8%80%95%e5%b9%b3%e3%80%80research-question-vol-01%ef%bc%9a%e8%8a%b8%e8%a1%93%e5%ae%b6%e3%81%a8%e9%9a%9c%e5%ae%b3%e3%81%ae%e3%81%82%e3%82%8b/</a>
---

6. 研究組織			
	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------